



# ルーンルーパーズ 4

## 自衛隊漂流戦記

ALPHA POLTS

**浜松春日**  
*Kasuga Hamamatsu*

アルファライト文庫 



### バシリア

氷雪騎士団の  
生き残り。

### 加藤修二

海上自衛隊首席幕僚で  
蕪木の右腕。オタク趣味。

### 久世啓幸

陸上自衛隊三等陸尉。  
偵察部隊を率いて  
マリスアへ赴き、  
戦いに巻き込まれた。

### バルバディア

せきがん  
隻眼の海賊。

### ルー

ハイエルフの女性。  
美貌とは裏腹に、  
残念な性格の  
持ち主。

### カルダ

マリスアの  
飛行軽甲戦士団の  
団長。

### ピクティ

帝国のスパイである  
ダークエルフの少女。

### ラロナ

マリスアの  
飛行軽甲戦士団の  
練戦士。

### 蕪木紀夫

海上自衛隊海将補にして、  
艦隊の最高責任者。現場主義が災いし、  
出世コースから外れる。

協力 防衛省 海上自衛隊 海上幕僚監部広報室  
呉地方総監部  
第1輸送隊 輸送艦しもきた  
第1潜水隊群  
潜水艦教育訓練隊

## 目次

序章	紅の記憶	7
第1章	それぞれの胸中	14
第2章	抜錨	52
第3章	占領地	94
第4章	阻止線	142
第5章	灰色の魔王	181
第6章	箱船	218
第7章	海峡	255
終章	新たなる島で	328
エピローグ	目覚め	342

## 序章 紅の記憶

木の焼け焦げた臭いが鼻を突く。

その臭いは、エルフにとっては死臭に近い、忌むべきものだった。

彼女は目の前に広がる光景を見た瞬間、あまりの現実感のなさに、しばらく呆然と立ち尽くしてしまった。

里が燃えていたのだ。

数千、中には数万年の樹齢を持つ聖なる原生林の中にひっそりと存在する、ハイエルフの里。そこは今、轟音を立てて燃え尽きようとしていた。

生ある木が焼けるときに発する、絶叫のような炎と煙に、彼女は慄然とする。

今朝、小鳥たちのさえずりに見送られながら里を出たときには、こんな光景が待っているなど、彼女は想像すらしなかった。

状況が呑み込めぬまま呆けていた彼女だったが、里の入り口で一瞬、身を伏せた。

近くで人が倒れている。里の同胞だ。

彼女が悲鳴を上げて同胞に駆け寄り寄らなかつたのは、その同胞の背に矢が突き立っていたからだつた。

見渡せば、数え切れないほどの同胞の死体が辺りに散乱していた。

ただの山火事ではない。そう直感した。

これは襲撃だ。

彼女は息を潜め、里の入り口から迂回し、自分の家へ急いだ。

エルフは巨大な木の幹の中を住居として使っている。里で一際大きな幹を持つ大木が、彼女の家だつた。

玄関から入ると、襲撃者に気付かれかねない。彼女は、いつも親からは、い、い、い、から止めるようにと注意されている、隣の木の枝伝いで自分の部屋の窓へ飛び込んだ。

荒らされた自分の部屋で、じつと耳をそばだてる。いる。間違いない。

彼女は、気配を殺して階段を下りていく。

最後の段を下りたとき、靴が何か粘着質なものを踏んだ。

それが血痕だと気付いたとき、彼女は声にならない悲鳴を上げていた。

刹那、エルフ語が聞こえた。

しゃがれた声に、聞き覚えはなかつた。

里の同胞のものではない。

襲撃者のものだ。

「……まだ生き残りがいたのか」

彼女は、その声をした方を振り向く。

いくつもの人影があつた。

そして、彼らの中心には、重なるように倒れた二人——両親だつた。

母を庇おうとしたのか、父は母の上に覆い被さって息絶えていた。

二人の血が流れ、血溜まりとなつて自分の足下になで広がっている。

燃え移った炎に赤く彩られた家の中で、返り血に頬を染めた襲撃者達の姿が、彼女の目に焼き付いた。

褐色の肌、自身と同じ長耳を持った種族。

——デックアールヴ。

例えようのないドす黒い感情が、彼女の中に渦巻いた。

彼らに復讐を誓う呪詛の叫びが、自分のものであると気付かないほどに——



ゴン、と鈍い音と鈍痛が彼女を襲った。  
「痛ったああ!?」

頭を押さえてのたうち回る。

一体何が起きたのか分からず、頭をさすりながら彼女は上を見た。

すぐ目の前に、上のベッドの底面が見える。

ややあって、ああ、そういえば、と彼女は思い出した。

『生憎、部外者用のベッドは三段がメインなんです。起き上がるときは気をつけてくださいね』

確か、こんな説明をここに来たときに受けた。あのちっこい、ハセガワとかいうルーントルーパーズの女性将校にだ。

船の中でありながら、ベッドで寝ることができただけありがたいのだが、いかんせん、狭い。女性用として割り当てられているこの部屋も、背の高い彼女には何かと不便だった。初めてこの船に来たときも通路で頭をぶつけたし、蚕棚のような三段ベッドに寝ていることを意識しなければ、こうして頭をぶつけてしまう。

三段ベッドの二段目に入っていた彼女は、就寝時に閉めていたカーテンを開けると、そもそもベッドから這い出た。

ほとんど下着同然の姿で、うーん、と伸びをする。

小さい部屋に三段ベッドが両脇に二つ。つまり六人部屋だ。

吐息が聞こえる。自分の下の段は確か神官のリユミだったはずだ。癒しの魔法を使って疲れているのだろう。

他にも、飛行軽甲戦士団のカルダが上、向かいのベッドには内地軍のディアナにヴァレンもいる。

ひたひたと暗い部屋を歩き、カバ、と丸い舷窓を開けてみる。

外はまだ真つ暗だ。おそらく深夜だろう。うっすらと、マリースア王都であるセイロドの夜景が見える。海から見る寝静まった都の景色は、なかなか美しい。

彼女は、自分が汗びっしょりであることに気付く。  
酷い夢を見た。少し、頭を冷やそう。

彼女はそう思い、部屋着のチュニックを着て外へ出ようとした。

「……うなされていたな? ルー殿」

不意に声をかけられた。

シャッ、とベッドカーテンを開ける音がした。

緑色の髪の美女が、こちらを見つめている。

「起きてたの、カルダっち?」

「あれだけ派手に頭をぶつける音がしてはな」

彼女——ルーはばつが悪そうな顔をした。

「悪い、起こしちゃった」

「いいさ。野営に比べればこのベッドは天国だ。またじきに寝る」

「そう」

ルーはカルダに苦笑した。

「……穏やかじゃない寝言だったぞ」

一瞬、ルーは背筋に冷たい汗がわくのを感じた。

「そ、そんな酷かった？」

「ああ、殺してやる」とね……」

カルダの言葉に、ルーは絶句した。

夜中の暗い寝室に、奇妙な静寂が横たわる。

「悪い夢よ。忘れてちょうだい……」

ややあつて、絞り出すようにそう答える。

「ああ。そうだな」

カルダは、再びカーテンを閉めた。これ以上、詮索する気はないようだ。

ルーは、軍人の彼女が、エルフとはいえ根無し草である自分の奇行を不審がらなかった

ことを不思議に思った。

すると、カーテンの奥から小さく、カルダは付け加えた。

「……悪い夢か。私も、前はよく見た」

カーテンの向こうで、寝返りをうつつ心配がした。

ルーはしばらく立ち尽くし、そして尋ねる。

「前、は？」

返事は戻ってこなかった。

カルダの静かな寝息が、ルーの耳に微かに届いてきた。

## 第1章 それぞれの胸中

延灯許可をもらい、輸送艦<sup>クシモキタ</sup>の第2士官室を借りて書類仕事をこなしていた久世啓幸は、タイプを止めて腕時計を確認した。

「うへえ……」

深夜の午前二時半。

疲れた。訓練こそないものの、仕事の拘束時間はなかなかバカにできない。このところの睡眠時間は四時間を切っていた。

自衛隊の若手幹部は概してそんなものだが、特に久世の場合はルーチンワークや準備が事前にできる類の仕事ではないため、苦労度が段違いだった。過去、自衛官の中に「ダークエルフの少女を尋問する」という任務に当たった者などいるはずもないのだ。

あの、ピクティと名乗ったダークエルフ（この世界ではデックアールヴと呼ばれている）の少女の、その日の様子や得られた情報、一日の経過などの報告書や、今後の予定、果ては同行者であるルーヤカルダ達のような異世界側の面々の食数通報に、動向に異常が

なかったかななどの特命事項の作成まで、やるべきことは山積<sup>たせき</sup>していた。そして、それらが全て、久世の仕事としてのし掛かっている。

あと少しで仕上がる文書を、ひとまずノートパソコンに保存し、席を立った。どの道、この文書を終わらせても次がある。ここで一息入れたい。

眠りそうになる頭のためにも、コーヒーでも飲みながら少し夜風に当たろうと思った。若干広めな応接室程度の第2士官室の電気を消し、廊下に出る。第2士官室という呼び名の通り、すぐ近くにはより大きな第1士官室がある。艦長や幹部隊員達が会食したり会議をしたりするのは、そちらである。第2士官室は雑務を行うための部屋だった。

護衛艦は二十四時間態勢で当直の者が管理しているので、人がまったりくれないわけではない。しかし、やはり深夜は静かなものだった。それに、夜は通路の多くが赤色灯に変わるの、昼よりひっそりとして見える。

第2士官室から科員食堂の横までやって来る。

補給科の隊員、つまり給養員達は朝食の仕込みをしているらしく、物音が聞こえた。だが、それともたいして大きくはない。

ここには、艦内で唯一のアイスが入った冷凍庫と、自動販売機が設置されている。海外派遣では滅多<sup>めった</sup>に使わない小銭入れをポケットに入れていた久世だが、珍しいことにこんな時間に先客を見つけた。



自動販売機の明かりに、白い肌はだと赤い紋章もんじょうが照らされている。先客の女性は壁に背中を預け、ぼうっとした表情で自動販売機の明滅を眺めていた。

いつものとは違うチュニツク姿だが、間違いはない。ルーだ。

寝惚ねぼけ眼まなこだった久世は、唐突に現れたエルフの姿に一瞬、自分が夢でも見ているような気持ちになる。この無骨むこつな輸送艦の艦内風景に、森の妖精が佇たなずんでいるのだから、そう感じてもおかしくはない。

「……な、何してるんです、ルーさん？」

思わず、ポケットに手をつ突っ込んだまま、呆然ぼうぜんと尋ねたずねてしまう。

ルーは話しかけられると思っていなかったのか、べたんと力なく垂れていた長耳をはつとさせて、久世を見た。

「ク、クゼくんこそ、こんな夜更けに何してるの？」

「い、いや、僕は仕事が残ってるんで」

その答えに、ルーが目を丸くした。

「え？　こんな遅くまで仕事してるの!？」

「ええ。書類作成だけでも膨大ぼうだいですからねえ……」

久世は苦笑して、首をコキコキと鳴らした。労働の過重をどこか誇らしげに語るのは、日本人の性さがである。

だが、彼女はそれを、疲れ果てて正常でなくなっていると思ったらしい。

「……クゼくん、大丈夫？」

本気で心配そうな顔をされてしまい、久世はどうも滑すべつたらしいと気付く。

「ま、まあ、いつものことなんで僕はいんですよ。それより、何でまた自販機の前まえに？」

「ジハンキッって言うの？　この祭壇」

ルーが、目の前の赤い塗装の、ごく一般的な自販機を見つめて尋ねたずねる。

「さ、祭壇？」

久世は予想外すぎる言葉に目を丸くする。

冗談じよんたんかと一瞬思ったが、彼女の様子からすると、どうもそうではないらしい。

「だって、ここだけ派手な装飾だし、夜でも不思議にピカピカ光ってるし、それに時々誰かやってきてお賽銭さいせんを入れてるじゃない？」

久世はしばらく言葉を失う。

「あ、ああ、そっか……異世界の人が日本の自販機見れば、そう感じるかな……？」

言われてみると確かに、艦内ではこの自販機だけが、カラフルな赤い塗装な上に、二十四時間明るく点灯している。それに、小銭を取り出して入れている光景は、これが飲み物を購入する機械だと知らない人にとっては奇異そのものだろう。

そもそも、自動販売機がここまで普及しているのは地球でも日本だけだ。久世も学生時

代に日本の感覚で外国へ旅に出て、道ばたどころか屋内にすらほとんど自販機がないことに苦労した記憶があった。

「え？　ち、違うの？」

目の前のカラフルな箱がどうやら祭壇ではないらしいと知ったルーは、素直に驚いていた。

久世は笑うと、小銭入れを取り出した。

「ルーさん、何飲みます？」



久世はそこに着くと、手すりに身体を預け、異世界では貴重品になりつつある缶コーヒートのブルタブを開けた。

「ふいー……つつかれたー……」

輸送艦<sup>しゆんそうかん</sup>しもきた<sup>で</sup>で夜風に当たるとにちょうどいい——というより、ルーのような目立つ人物と一緒にいてもじろじろ見る者がいない場所を、久世は選んでいた。

輸送艦の後部に位置する、<sup>ばくち</sup>暴露甲板<sup>ばくち</sup>と呼ばれる通路である。ここは、第1甲板と呼ばれる上部の全通甲板の下にあり、ここだけ通路が外に暴露<sup>ばくち</sup>された状態になっていた。壁

面を見ると、長方形のドアのようなものが無数に並んでいる。ダンパーと呼ばれるこれは、搭載<sup>たうざい</sup>されているエアークッション艇<sup>しん</sup>が猛烈なプロペラ推力で格納庫から離発着する際に発生する風圧や高温ガスを、艦外に逃がすためのものだ。普段は静かで、海を見ながら黄昏<sup>たそが</sup>れることができるので、久世達陸自の者にとっては密かな憩い<sup>やすみ</sup>の場だ。

「涼しい……」

隣に、チュニック姿のルーが立った。

彼女の手には、久世が奢<sup>ちか</sup>った彼と同じ缶コーヒーが握<sup>にぎ</sup>られている。

「あれ、それどうやって開けたの？」

久世が口を付けているのを見て、彼女が不思議そうな顔をしている。

「ああ。ちょっと貸して。ここを、こうやって……」

子供の頃に行楽地で親に同じようにしてもらった記憶を思い出しながら、久世は彼女の缶を開けてやる。

「へえー、器用なもんねえ」

ルーは、久世から受け取った缶をしげしげと観察している。

「それにしても、こんな小さな鉄の容器を、飲み物が入るようによく作ったわねー？」

中身よりも、一体どういう仕組みで缶が作られているのが気になるようだった。

製鉄所でタルク材が作られ、それが製缶メーカーに送られ——といった工程を夜中に話

す気にもなれず、久世は苦笑するしかない。

「それより、ルーさんはどうしてあんなとこに立ってたんですか？」

「んー……ちよつと眠れなくて。あそこ祭壇だと思つてたから、神様でも眺めてたら落ち着くかなって」

「あつはっはっ！」

久世の笑い声が深夜の暴露甲板に響いた。自販機に神様がいると思つた発想が単純に面白かつたせいだ。

疲れた頭には程よい笑いだ。

「むー……」

月明かりに照らされ、夜目にも彼女が顔を赤くしているのが分かる。さすがに、的外れすぎる考えだつたのが恥ずかしいようだ。

「クゼくんこそ、何でこんな遅くまでダークエルフなんかの仕事に熱心をやつてるのよ？」

「任務に良いも悪いもないんですよ。与えられた以上は全力でやらないといけないんで」

ルーは、そんな模範解答が欲しかったわけじゃないと、コーヒーを大きく飲んでから、久世の顔を覗き込んだ。

「ホントにそう思つてる？」

「もちろん」

「本音はどうなの？」

「本音ですってば」

久世は、三白眼でこちらを見ているルーに慌てた。

「ルーさんこそ、僕がダークエルフのために仕事してるのが、どうしてそんなに気になるんです？」

何気なく聞かれたことに、一瞬ルーが言葉に詰まった。

久世が訝しがる前に、彼女は答える。

「そりゃあ」

ぶい、とそっぽを向いて答える。

「アタシはクゼくん絡みの仕事だから、ここまでついてきてるんだもん」

「はあ？」

久世は話が見えないので生返事するしかない。自分が関係しているからやってきてくれた、という理由が分からない。

ルーはしばらく、月が映り込んだセイロード湾の水面を無言で見つめ、そして小さく呟いた。

「……クゼくんには言つてなかつたけどさ」

「えっ？」

彼女は逡巡しゆんしゆんの末に、打ち明ける。

「アタシにとつては……ダークエルフは敵だから」  
意外な告白に、久世がぎよつとする。

「でもそれなら、何であの公園で助けたんですか？」

「あれは、クゼくんを助けたかったからよ」

「……ルーさん、何かあったんですか、ダークエルフと？」

久世の問いに、ルーは身を硬くする。

そして、飲み終わった缶を静かに久世に押しつける。

「うおっとつと!？」

「ごちそうさま。おいしかった」

すたすたと、あつという間にルーの背中が闇に消えていく。

久世は、慌あわてて受け止めた空き缶に両手を塞ふさがれ、彼女を呆然まうぜんと見送るしかなかった。



目を覚まして二日が経とうとしていた。

その二日間を、ピクティは内心戸惑とまいながら過ごしていた。

今は三日目の朝で、目の前には、自分を尋問じんもんする立場にあるらしい人間の男が座っている。  
気味の悪いまだら模様の服を着て、そして、自分に恐れも向けおそけない男。

「最近、元の世界から持ってきた食材を節約するせいか、朝に米と味噌汁みそじゆが出なくなつた

なあ……」

そんなことを呟つぶやきつつ、彼はパンを嚙かり、スープを啜すすっている。

それはまだいい。

だが、彼が食卓に並べているものと、捕虜ほりよでありダークエルフでもある自分に出されているものが同じというのは、どうにも解げせなかつた。普通なら、相手が同じ人間だつたとしても、捕虜ほりよにこんなまともな食事を出すはずがない。しかも、彼はどうも将校しょうこうのようだ。つまり、これは将校待遇しょうこうたいぐうということだった。

「どうしたの？ 口に合わない？」

「い、いや……そんなことはないが」

ピクティは彼から促され、今日も栄養のあるまともな食事を取つた。

「あ、あの、クゼさん、ところで……」

同じテーブルに座っている、まだ幼い光母教神官こうぼきょうしんくわんの少女が、久世に向かって遠慮えんりょがちに口を開いた。

疑問と言えばこれも疑問だった。

異教徒であるはずのあの男に、どうして神官が付き従っているのか。

「彼女、ずっと水浴びをしていないのか、その……」

ギクリとして、ピクティは耳をツンと強張らせた。

神官の言葉に、騎士達が「ああ、確かに」と同意の声を上げる。

「そりゃあ、ずっと宿にさえ泊まれない生活してたんだから当然よね」

「デックアールヴ」は臭いと聞くが、実態はそんな任務が多いからなんだろうな」

騎士達の言葉に屈辱を感じたピクティは、肩を震わせて彼らを睨む。

すると、警備として後ろに控えていた松山海士長が割って入ってくる。

「こちら、女の子にそういう無神経なことを言わない」

ピクティはそんな何気ない松山のフォローに目を丸くした。人間が自分を指して、いや  
ダークエルフに対して「女の子」などという表現を使うのを初めて聞いたからだだった。

そして、担当士官である長谷川二尉が、メガネに光を反射させて呟いた。

「でも、確かに問題ですね。衛生上よろしくありません」

「じゃあ、午前中はこの後、入浴でいいですかね？」

「いいんですか？」

「まあ、のんびりいきましよう」

久世は、大急ぎで艦内図書室で検索した捕虜尋問のマニュアルに沿い、まずは捕虜との  
人間関係の構築のために時間をかけるつもりでいた。疲れの癒えない彼女に、尋問を強要  
するつもりはない。

ピクティは、そんな地球の心理学に裏付けされた捕虜の取り扱いを理解できるはずもな  
い。ただ驚きの表情をすただけだった。この世界での捕虜への尋問と言えただだ一つ、拷  
問による自白強要しかないのだ。

「今の時間なら、風呂場は誰も使っていないですから確保できますし、そうしましよ」

長谷川も彼女の身の回りについては色々と考えているらしく、意に沿う方向としてそれ  
を歓迎しているようだった。

「あ。でも……」

松山がふと思い出したように言った。

「彼女、シャワーとかカランの使い方とか、そもそも日本式の入浴方法を知らないんじゃない  
あ……」

久世と長谷川が顔を見合わせた。

何も異世界のダークエルフに限った話ではなく、外国人は日本式の入浴の仕方というの  
を知らず、身体を洗わずに湯船に入ったり、泡まみれのまま入浴したりとトラブルが絶え  
ない。もちろん、捕虜である彼女には警備として松山が同行するものの、彼女が裸になっ

て風呂の作法を教えるわけにはいかない。

となると、誰か一緒に入ってあげられる人物が要る。

「あ」

長谷川は、新たな女性自衛官の応援を頼もうかとも思ったが、ただでさえ「いぶき」から特別に松山を寄越してもらったりと無理を言っているので、あまり面倒を抱え込みたくなかった。

そんな中、彼女のメガネに縁取られた視界に入った人物。

ピクティと名乗った少女同様に、笹の葉のような耳をした美女。

確か彼女は、前日、大はしゃぎでこの「しもきた」の浴場に入り、松山士長に叱られるから一通りの入浴作法を教えてもらっているはずだ。

「あ、あによ？」

ルーは、何故自分が見つめられているのか分からず、パンをもつしやもつしやと食べながら、怪訝な表情を浮かべるのみだった。

長谷川は眼鏡の位置を中指でクイツと直し、久世の方を向いた。

「彼女なら？ お暇そうですし」

真面目な性格の長谷川は、本気であのタダ飯食らいのエルフに仕事をしてもらおうと考えていた。

「えー……」

久世が難色を示す。

昨日の夜にルーが見せた不可解な様子が脳裏を過つたからだ。

ダークエルフを快く思っていないのは明らかかなルーを、ピクティの近くに置いて大丈夫なものだろうか。昨夜はこんなことになるとは思っておらず、深く詮索しなかったのが悔やまれる。

どうしよう……？

万が一、ルーがピクティに危害を加えるようなことになったら、責任問題どころではない。

昨日の今日でいきなり困ったことになった、と久世がちらりとルーの様子をうかがおうとすると、ぬっと彼の前に人影が現れる。

「なーにー？」

こそこそしている久世のことなどお見通しとばかりに、ルーが目の前で仁王立ちしている。そういえば、エルフは人間よりも耳がいいのだ。今の会話も丸聞こえだったのかもしれない。

ルーの事情を知らない長谷川が、久世より先に口を開く。

「ああ、実はあなたに仕事があつてですね……」

その瞬間、焦った久世は勢いよく席から立ち上がった。

「ルーさん、ちょっとここに！」

久世はルーの手を掴むと、食堂を出ていく。

普段の久世からは想像もできない強引さに、周囲がざわざわと後ろ姿を見送っていた。

久世は、自分達がいた科員食堂からそう離れてはいない第2土官室にルーを連れて入ると、ドアを閉める。幸い、まだ朝早いだけあって誰もいない。

密室状態になったことに、ルーが頬を赤らめてもじもじする。

「も、もう……こんなところに連れ込んで、クゼくん朝から過激よう」

「言うと思ったけど違いますっ！」

久世はさすがにおおよそ予想していたので、速攻で突っ込みを入れた。

あらあら無粋ねえ、とほやきながらルーが真面目な顔になる。腰に手を当て、目をすつと細めて久世を見据えた。

「で、何の話？」

彼女の変わりように気圧されてしまった久世は、すぐには切り出せない。

「た、たいした話じゃないんですが……」

久世は腕を組んで思案顔になる。どう話せばよいか考えあぐねていた。

「あのダークエルフでしょ？ で、風呂入れるですって？ マジ嫌なんだけど」

ルーがため息をついた。

「ま、まあ、そうなりますよね……」

久世が見透かされたことに困惑の表情を浮かべる。やはり最初から聞こえていたのかもしれない。

「どうしても嫌ですか？」

「ずうえつたいイヤー！」

念を押したが、やはり断られる。

久世はこれ以上、彼女をビクティに近づけるべきではないと感じ始めていた。

「いや、待てよ……？」

だが、久世はそこで思いとどまる。

（なんだろう、この違和感……）

ルーがこの船にやって来てからの一連の様子を思い出す。

すると、ややあって久世の表情は明るくなった。

「ルーさん、やっぱりやってくれませんか？」

久世が頼んできたことに、ルーが驚く。

彼の場合、こちらが嫌だと言ったら素直にその意を汲んでくれると思っていたのだ。

「は、はあ!? クゼくん、今アタシ嫌だって言ったでしょ？」

「いやいや、ここは同じエルフ語を話せる人同士がいいですよ、うん」  
久世はにつこり笑うと、ルーの両肩をぽんぽんと叩いた。ルーが目を丸くして彼を凝視する。一体、彼はどうしたというのか分らない。

「そうしよう、やっぱりそうしよう」

ルーは、久世が勝手に納得したらしいことに焦る。

「ちょ、ちょっとクゼくん、どうなっても知らないわよ？ 昨日あんなに言ったじゃない？」

「風呂入れるくらいでどうもなりませんよ、きつと」

彼女は予想外の久世の強引さに困惑する。

久世はうんうん、これでいい、と眩きながら部屋を出ていこうとする。

そんな彼を、ルーは呆然と見送るしかない。

久世はちらりと振り返り、少しすまなそうに笑った。

「ルーさん、僕に嫌だつてはつきり言ったじゃないですか。これですんなり最初から受け入れてたら怖かったですけどね」

「え……？」

ルーは久世が何を言っているのか分らない。

「あの子に何かするとしたら、もつと前にいくらくでもチャンスがあったじゃないですか。

それに、僕のためについてきてくれてるんですよ。あの子に何かしたら僕が困るわけですよ？」

久世が珍しく意地悪な表情でルーを見た。

ルーは少し考えてから目頭を押さえて「ああ、しまった……」と眩く。

ダークエルフを心の底から憎んでいて、危害を加えるつもりなら、久世が言う通りここまでにチャンスはいくらでもあったのだ。眠っているときなど、絶好の機会だったことだろう。

だが、彼女はそうはしなかった。そして、昨日の夜には、久世のためにここまでやって来たと話している。つまり、久世が困るようなことはしないだろうし、あのダークエルフを憎しみから危害を加えるほどの衝動は今のところないと判断したのだ。

もしチャンスを狙っているとしたら、ここで久世達の提案を不承不承でも受け入れるはずだ。しかし、ルーは断固嫌だと断った。

だからこそ、久世はルーのことを信用したのだ。

彼は腕時計を確認しながら、こともなげに言った。

「じゃあ、風呂からあがったら教えてください。僕、書類片づけてますんで」  
ぱたん、とドアが閉まる。

ぼつんと一人部屋に残されたルー。



「バカ！ 女たらし！」  
部屋の中で一人、ずいぶんと人聞きの悪いことを叫んだのだった。



輸送艦<sup>しよきた</sup>もきた<sup>ぐ</sup>は、女性自衛官が多く搭乗<sup>とうじやう</sup>するようになったこともあり、女性専用浴場というものが設けられている、海自の中でも珍しい艦<sup>せふた</sup>だった。

艦内には数カ所、大小の浴場が点在している。

それぞれに番号が振ってあり、<sup>第2浴室</sup>が女性専用として割り当てられていた。

「ったく、何でアタシがデックの入浴介助しなきゃなんないのよ……」

「本当ならもう仕事がないんでしょう？ タタ飯食わせてもらっているんだから、少しは働いたらどうなのですか？」

「がっぺ、ムカつくわねアンタ!？」

ルーとピクティが、脱衣所で服を脱ぎながら文句を言いあっていた。

「ほらほらー、エルフ語でケンカしないー」

紺や青のデジタル迷彩服の警備装備の松山が、服を脱ぎ終えた二人を浴室へ押し込む。

「ああはいはい……わかったわよー」

ルーは洩<sup>しほ</sup>々、従<sup>したが</sup>う。

ピクティも、ぶい、と顔を逸<sup>そ</sup>らしつつも従った。

二人は、バスタオルを身体に巻いただけの姿だった。

ピクティが一枚で十分なのに対し、ルーは長身な上に出るところが出ているので、一枚では足りず、胸と腰に二枚巻いていた。

(ふわあ……二人ともすっごい綺麗な肌<sup>はだ</sup>してる……お手入れしてないとか嘘でしょ、これ)

松山は同性として、愕然<sup>がくぜん</sup>とするばかりだった。

白磁<sup>はくじ</sup>のような肌<sup>はだ</sup>に、紋章<sup>もんじやう</sup>を引いたルー。

そこいらのモデルが裸足<sup>はだし</sup>で逃げ出す肢<sup>あし</sup>体を誇<sup>たか</sup>っている。

チョコレート色の肌<sup>はだ</sup>に銀髪<sup>ぎんぱつ</sup>が輝<sup>きら</sup>く、ピクティ。

量産品のアイドルが束<sup>むく</sup>になっても敵<sup>かた</sup>わないに違い<sup>ちが</sup>い<sup>い</sup>ない整った顔と、エキゾチックさ。

まるで妖精<sup>まじ</sup>みたい、と思ったが、実際に彼女らは妖精族<sup>まじぞう</sup>に類<sup>る</sup>するれっきとした妖精<sup>まじ</sup>だった。彼女らがより自然にに近い姿となれば、それこそ精霊<sup>まじ</sup>の類<sup>る</sup>となることだろう。

職務柄<sup>しよくむづら</sup>、努<sup>こ</sup>めて冷静<sup>れいじやう</sup>を装<sup>ま</sup>っているが、松山はそんな二人の入浴風景<sup>にゅうよくふうけい</sup>に心を奪<sup>さら</sup>われていた。ルーはピクティを風呂椅子<sup>ふろいす</sup>に座<sup>ま</sup>らせると、シャワーのノズルを取<sup>と</sup>ってその説明<sup>せうめい</sup>を始める。「これがシャワー<sup>シャワー</sup>よ。面白いことに、この取っ手の先<sup>さき</sup>つちよから、細いお湯<sup>みづ</sup>が出

るの」

「細いお湯?」

「こんな風に——」

彼女が勢いよくハンドルを回した。

同時に、シャワーのノズルから水が噴き出す。

声にならない悲鳴を上げて、ピクティが飛び上がった。

「冷たあああ!?!」

「あ、ごめん間違えた」

カコオン!

ルーの後頭部に、しもきたの湯とマジックで手描きされたプラスチック製の桶が飛んできた。

「ぬおおおおお〜……!?!」

松山が仁王立ちになって、のたうつルーを見下ろしている。

「今度くだらないことしたら、警棒でいくからね」

「やめて、頭陥没しちゃう」

涙目になって後頭部を押さえるエルフ。

こいつホントに百九十二歳か、という疑問が松山の脳裏に過る。

「しゃーないわねー、命は惜しいから真面目にすつか」

泐々、といった様子おのルー。

すると、ピクティが信じられないものを見たかのような顔をした。

(つまり、今まで真面目にできなかったんですね……?)

捕虜ほりよにまで「大丈夫かこいつ」と不安感を抱かれながら、エルフの女はここでの作法とやらをレクチャーするのだった。



ちゃぶん、と湯船に浸かると、ピクティは耳をべたんと下に向けた。

(気持ちいい……これが船の中だなんて信じられない……)

彼女は、必要とあらば数週間の隠密任務にも耐える自信があるが、本来は綺麗好きな方だった。部族がまだ元の森にいた頃は、奥地にある天然温泉によく湯浴みに行っていたし、そうでなくても川や滝での水浴びはできるだけしていた。

とはいえ、そんなものは自然条件が与えてくれる贅沢品ぜいたくひんであり、まさか敵地で享受できるものとは思わなかった。しかも、鉄でできた船の中で。

艦内で見かけた青色の服を着た船員達が、必死になって薪まきをくべてお湯を沸わかしている

イメージがピクティの脳裏に浮かぶ。

(捕虜にここまでのことをするなんて……)

彼女は益々、異世界の人間達の考えていることが分からなくなった。

——実際は、タービンの余熱を使って沸かしているため、薪をくべる隊員などいないのだが。

『あふー、なんかもうこれ終わったら、今日は酒飲んで昼寝したいわー』

ぐうたら度一〜二割増しな発言を平然とするエルフの女が隣にいれば面白い。

だがピクティは、異世界の人間と同じく、このエルフのことも気になっていた。

ちらり、と盗み見る。

不意に、目があった。

『そういえば』

『あん？ 何よ』

『お前のその紋章、ハイエルフのものだな？』

最初に見たときから引つかかっていた。

単に普通のエルフが紋章をボディペイントしているだけかと思っただが、身体を洗っても落ちない辺り、そうではないようだ。刺青とも違う。ハイエルフ族だけが持つ、精霊力を高める秘伝の紋章が身体に走っているのだ。



『ガキなのによく知ってるじゃない』

『エルフの中でも上位種族。その分誇り高く、人里へ姿を現すことなどまずない。そんなハイエルフが、どうして異世界の男に侍はべっているんだ？』

『侍はべってる、か。それいいわね。今度から使わせてもらおうわ』

笑いながら、彼女は肩に湯をかけた。

『はぐらかすな』

『んふー、いい湯だわー、ちよつと潮臭しほいけど』

『……愛してるのか？ あの人間の男を？』

少女の問いに、ルーは湯船の縁むらにうつとりと上気した顔を横たえ、妖艶ようえんに微笑ほほえんだ。

『……大人のオンナはね、愛を安く語かたったりはしないのよ？』

表情こそ立派だが、ここに至るまでの低レベルすぎる悪戯いたずらを見てみると、どこをどう取ればお前が大人なのだと言いたくなってくる。

『ま、興味があるのは確かだけど……』

『奴は、そこまでの器なのか？』

ルーは『んー』と思案顔を見せた。

『大した器よ。底が抜けてて中身だだ漏れっばいけど……昨日の夜にあんだけ言ったのに、アタシを信じてここを任せちゃうんだから』

ルーはそう言うと、ピクティの頭かぶに桶かじでお湯を被かせた。

『わっぷ!?』

『さ、そろそろ出よつか。のぼせるわよ』

じゃば、とルーは女神像のように整った身体を湯船から出す。

流れる水滴でさえ絵になりそうだった。



ぶごー、とピクティはそのショートカットの銀髪を、ルーに乾かさされていた。

脱衣所にある洗面台に備え付けのドライヤーだった。

最初、温風を吹き付けられることと、けたたましい音を立てる奇妙な道具に抵抗感を示した彼女だったが、髪の長いルーがそれで髪を綺麗きれいに乾かしているのを見て、態度を改めた。というか、妙な対抗心もあった。

『どっつ?』

椅子に座り、髪を梳かかれながらドライヤーを当てられていると、唐突にルーに覗ぞき込まれ、ピクティはちよつと頬ほを赤くした。

目を細めて気持ちよさそうにしているのを見られたからだだった。

『……悪くない』  
ふい、と顔を逸らす。

だが少しして、ピクティはふと口を開いた。

『ところで……』

『んー？』

『ハイエルフの里からは追い出されたのか？』

あの男に付いている理由は何となく分かったが、ハイエルフの彼女がこんな場所にいる訳はまだ分からない。

ルーはひらひらと手を振る。

『うんにゃー、そもそも故郷の森、もうないのよ』

『戦争か？』

珍しい話でもない。

ピクティはそれで何となく納得する。

ルーはドライバーを丁寧に当ててやりながら、松山が気付かないほどの一瞬、殺気に満ちた目をピクティに向ける。

『百年前、ダークエルフの襲撃で村ごと焼かれたから』

ドライバーの音にかき消されそうな声だったが、ピクティは心臓を鷲掴みにされたかの

ように思えた。

エルフ語の分からない松山が、風呂上がりがだというのに顔面蒼白になったピクティを、怪訝そうに見る。

『……安心しなさいって。別に取って食ったりはしないわよ』

ルーがため息をついて、スイッチを切った。

『はい、おしまい』

ぼん、と肩を叩くと、ピクティはルーを振り返った。

その顔には、警戒感が宿っている。

『監視の目がなければ、私を殺す気か……？』

ルーはその問いに肩を疎める。

『それも考えたけど、やらないって決めた』

『あの男にそう命令されたのか？』

ダークエルフが闇の世界に生きているのは、ピクティ自身、十分に理解していた。それ故に自分達を憎む者は多く、迫害が止むこともない。ダークエルフに生まれるということ、憎しみに憎しみを報いる生き方することに他ならない。このハイエルフの女も、そんなダークエルフへの憎しみに囚われた一人に違いない。

復讐心は、どんな感情よりも強いものだ。それを思い止まらせるのは容易なことではな